青き紅玉（Blue Ruby）は黒に焦がれる

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青き紅玉（Ｂｌｕｅ　Ｒｕｂｙ）は黒に焦がれる

【Ｎコード】
Ｎ１７９０Ｋ

【作者名】
ＣＥＮＴＥＲ

【あらすじ】
他国との交流を絶つ鎖国政策が解かれてから、今年で五年。
この国――四つの島からなるヤマ大国には、毎日何十と言う外来船が訪れている。
北から南まで、大きな港は全て埋まり、外洋に面している小村にすら船が訪れる有様だ。
この村も、そんな村の一つ。
外国、特にユーロ連合と呼ばれる国家圏からの船は、この国にない物を沢山運んでくる。

この国にない人種、道具、技術、魔法。
外からもたらされるものはこの国に発展を呼ぶ。
だが、持ち込まれるものはそれだけではなかった。
文化の違いによる現地人との諍い、持ち込まれた動物による生態系の変化、元々存在しなかった病気など、様々な問題をも同時に連れてくる。
そして、この村を訪れた船が運んできたのは、一人の血染めの少女だった。

『神に名前を奪われた者』と『血染めの悪魔』。
二人のどこか歪んだ恋愛劇の幕が開く――

（前書き）

友人と行った、参加者が互いに出した題にそって小説を執筆するという企画で書いた作品です。

前提条件「舞台はファンタジーの世界の港町」
お題【愛】【密会】【水】
という設定で書かれています。

この国の気候は優しい。

春から夏になろうかという今の季節は特に。

寒くもなく、暑くもなく。

けれど、彼女の姿を見たそのとき――熱を感じた。

私の胸は、今まで感じたことのない熱を帯びていた。

【青き紅玉（Blue Ruby）は黒に焦がれる】

他国との交流を絶つ鎖国政策が解かれてから、今年で五年。

この国――四つの島からなるヤマ大国には、毎日何十と言う外来船が訪れている。

北から南まで、大きな港は全て埋まり、外洋に面している小村に

すら船が訪れる有様だ。

この村も、そんな村の一つ。

外国、特にユーロ連合と呼ばれる国家圏からの船は、この国にない物を沢山運んでくる。

この国にない人種、道具、技術、術。

外からもたらされるものはこの国に発展を呼ぶ。

でも、持ち込まれるものはそれだけではなかった。

文化の違いによる現地人との諍い、持ち込まれた動物による生態系の変化、元々存在しなかった病気など、様々な問題をも同時に連れてくる。

そして、この村を訪れた船が運んできたのは――

「船が着くぞーーーー！」

水場で昼食に使われた食器を洗っていると、遠くにそんな声が聞こえた。

途端に、村が騒がしくなる。

村の中では海から一番離れているここまで聞こえてくるのだから、村の浮かれようがよくわかる。

浮かれすぎだ。

魚を取りながら細々と暮らしていたこの村に、外国からの船を迎えようと決まったのは今から一年前。

幕府に税を納めるので精一杯の暮らしを変えようという狙いなのだろう。

適当に小船が並んでいるだけだった砂浜に港が作られ、村はずれには猿真似の洋館も完成した。

最初の船が着くのが今日だった。

「名、奉じ給へ」

呟く。

旧態依然としたしきたり。

初名（はつな）。

両親が赤子に最初につける名前。

それは言霊。

知ればその人間を支配することができる。

生かすも殺すも。

だから、それは神様に捧げて守ってもらうのだとか。

名守(なもり)様。

八百万いるらしい神様の一つで、この村の守り神。

ちなみに、八百万というのはとても多いと言う意味。

八十(やそ)、八百(やお)、八千(やち)、八百万(やおよろず)。

全部数が多いことだ。ヤマ言葉って難しい。

この村に住んでいる人は、初名を捧げて、次名(つぐな)で生きている。

偽の名前。

生まれたときから死ぬときまで、徹頭徹尾嘘吐きだ。

そんなしきたりは変えないのに、外からの物は取り入れようとする。

古きをたずねて新しきを知るとは言うけれど、それはきっと水と油のように混ざらない。

「馬鹿馬鹿しい……」

その古いものの筆頭を身にまとって、何を言っているんだか。

緋袴を指でつまむ。

水がついて染みになった。

「はぁ……」

軽く凹む。外国の言葉ではブルーになると言うらしい。

ブルーは青という意味だとか。

外国では人が色になるらしい、驚きだ。異文化交流とは難しい。

「あぁ、そこにいたのですか」

水場に、中年の女性が現れる。

白い衣と緋色の袴。

私と同じ、名守様に仕える者。名祀（なし）のかんなぎ。

「巫頭様。何か御用でしょうか？」

巫頭（ふとう）様。

この神社で現巫様（うつつかんなぎ）に次ぐ地位の人。

御歳三十二歳。私のちょうど二倍。

「船が着きます。お招きができているか、確認をしてきなさい」

「私がですか？」

「他のかんなぎを俗世の穢れに晒すことはできないでしょう。いずれ、名守様の器となるのですから」

「……はい。わかりました」

頭を下げる。

応対は丁寧に。

逆らわず、流されるままに生きること。

いい子にしておくのが波風立てない秘訣だ。

私も名祀のかんなぎなんだけど。それを言ってもしかたない。

どうせ私にはその役目は回ってこない。

最初から穢れているから。ここにいてもただの雑用係。

名守様の器となるかんなぎは一年に生まれた赤子から一人選ばれる。

けれど、神降ろしは毎年やる必要は無い。

神を降ろしたかんなぎは人でなくなる。

神になる。

本祭殿に篭って、お神酒だけで生きる。

何ヶ月も、何年も。

けれどそのうちに死ぬ。

死んだら別の名祀のかんなぎが現巫になる。

くるくる廻る。しきたりだから。

くるっていると思う。

しきたりは人だって殺す。

例えば、わが子を名祀のかんなぎにするのが嫌で逃げ出した親とか。

あっさり捕まって殺されて、子は名祀のかんなぎになりました。

初名を捧げさせられて。けれど親がいないから次名はない。

だから、名前が無い。

しきたり破りの子が、名守様の器なんて素晴らしいお役目につけるはずがない。

ありがたいことだ。

両親のおかげだと思う。だから好きだ。

生まれてすぐに殺されたから顔も知らないけど。

両親は殺された。ついでに名前も奪われた。

器にはならないけれど、きっと一生囚われている。

だから、神様は嫌いだ。

大きな煙突から黒い煙を吹き上げる鉄の船。

蒸気船。

知らない技術を伝える船は、それ自体がこの国にはない技術で作られている。

村中から集まった人々が、その船を遠巻きに眺めながら騒いでいた。

さっきまでの浮かれているのとは何か違う。

戸惑っているような、そんな声だ。

船は着いている。

それなら私の仕事はもう終わっている。

言いつけられた役目は、確認すること。結界を。

結界。

内と外を切り離すもの。

ガリガリ。

地面に線を引いて、ここを越えてはいけません。

単純明快に切り離す。

招かれないものは、何者であろうと内に入れない守り。

許されないものは、何者であろうと外に出さない守り。

人も、獣も、魔の獣も、越えられない神様の線引き。

そうでなければ、わざわざ名守の神を飼い続ける意味がない。

人という餌を捧げるには、それだけの意味がある。

船という単位で招くのは初めてだったけど、着岸しているなら問題ない。

もう帰って構わない。

それなのに、人垣に近づいたのはきっと、変化を求めていたから。

過去も未来も奪った神様に囲われて生きる平坦な日々。

投げかけられる悪態にも波が立たない心の裡に似ている。

曰く、しきたり破りの子。

曰く、穢れた者。

受け流すのにももう慣れた。

処世術。元から嫌われ者なのだから、平穏に暮らすコツはすぐにつかんだ。

「た、大変だ！！」

頭上から声。

見上げる。

見知った男が、甲板から顔を出していた。

「み、みんな死んじまってる！」

そう言った男の隣から、飛んだ。

人間を縦に十人は詰める高さから。

光の川が見えた。

すた、と桟橋に着地する。

小さい。十歳かそこらに見える。

若い生命が四肢の隅々まで漲っていた。

一枚の布から作るこの国の民族衣装とは違う、飾り布がふんだんに使われた黒い服。

体に遅れてふわりと下りた腰布は短く、足の付け根を隠す程度。その代わり、長い足袋を履いていた。

最後に、光の川が降り注ぐ。

背中の中ほどを越えて長い、黄金色の髪。

自然に落ちただけなのに、ほつれ一つない。

肩より下で細い束を無数に作り、翠玉の飾りをつけている。

飾りからは銀糸が垂れて膝裏をくすぐっていた。

くどいほどの飾り。

それが、その少女自身の輝きの前では引き立て役にしかなっていない。

「そいつだ！　その女がやったんだ！」

頭上から叫び声。

喧騒が広がる。

煩い。

どうして、そんなことを言うのだろう。

彼女は、こんなにも――

「綺麗なのに――」

我知らず呟いた。

人垣の後ろから。声が届くはずもないのに。

なのに、彼女はこちらを見た。

紅玉のような、鮮やかな色の瞳。

船が乗せてきたのは、赤い瞳の少女だった。

赤い瞳の少女が村に訪れてから、七日が過ぎた。

彼女は勝手に洋館に住み着いてしまったらしい。

その後、村の男たちが化け物を倒すと息巻いて洋館に向かったが、返り討ちにあって逆に殺されたらしい。

らしいらしいと言うのは聞いた話だから。

私はあの後も、変わらない日々を送っている。

村は色々と騒ぎになっているようだけど、正直なところどうでもいい。

私には未来なんてないから。

この村がどうなっても関係なかった。

けれど、村人たちはそうも言っていられない。

連日のように、この神社では話し合いが行われている。

集まっているのは、村の有力者たち。

話し合いが終わらないからと、家にも帰っていない。

結界に守られた神社から出ない、都合のいい口実だ。

七日も話し合って何一つ解決案はでていなかった。

洋館を結界で封じるというのが唯一効果が窺える方法だったけど、結果から言うとそれは無理だ。

人と神との関係は契約。

私の考えだけど、名守様は名前を守っているんじゃない。

名前と引き換えに、結界を作っているんだと思う。

引く境界を増やすには、新たな報酬を払わなければならない。

現状で全ての村人の名前（そんぎい）を支払っているのに、それ以上何も払えない。

結局、私たちに出来るのは彼女の要求に従うことだけだった。

今日もまた、彼女の要求通り、若い娘が洋館に連れて行かれる。

嫌われ者の私は、最初に差し出されるかと思っていたけど、一応名祀のかんなぎである私は候補から外されたらしい。

化け物と呼ぶ少女への恐れと、名守様への畏れの板挟み。

気の毒な話だ。

それにしても、若い娘を要求するとは、神話に出てくる大蛇を思い出させる話だ。

そう言えば、あの大蛇は雄なのか雌なのか。

そもそも、大きな蛇が娘を要求してどうするんだろう。

いやまあ、どうでもいい話なんだけど。

「つまらないわ」

口に出して呟けば、村から差し出された娘がびくりと肩を震わせた。

おどおどと、こちらを窺う。

その瞳が気に入らない。

ここに来るのはみんなそう。

揃いも揃って怯えたような黒い瞳。

みんな同じ黒い髪に白い服。

その服が死人の着る服だと知って、余計に頭にきた。

私はそんなものが見たくて呼んでいるのではない。

私が見たいのは、ここ数十年の間代わり映えしない国の生活に飽きて潜り込んだ船が着いたときに見たあの子。

長く伸ばした艶やかな黒髪を二つ結びにして両手首に結んだ、雁字搦めに縛られているような子。

国でも、この地で船から降りたその瞬間も、他人が私を見る瞳には怯えがあった。

私を見ているようで、私の起こした結果だけを見ている瞳。

けれど、あの子の瞳だけは違った。
深海のような紺碧を秘めた黒い瞳は、純粋に私を見ていた。
人の壁を隔てて目を合わせたとき、彼女は何かを言っていた。
私は、それが知りたい。
この国の国民性かとも思ったけど、そうでもないようだし。
「ねぇ、あなた」
「はい……何でしょうか？」
「探している子がいるのよ。
白い服を着て赤いスカートをはいている子」
「す、すかーと、ですか？」
「あぁ、通じないのね。これの長いのよ」
スカートをつまんで見せる。
「そ、それなら、多分、名祀のかんなぎの誰かだと思います」
「そう。それで、その子は、どこに行けば会えるのかしら？」

燭台を手に、夜の神社の見回り。

誰もやりたがらない仕事は、全部私に回ってくる。

神社を囲む木塀は、そのまま結界の境界。

村の中でも一部の招かれた者だけがその境界を越えられる。

塀に沿って敷地の正面まで歩き、

鳥居の下に、金色の少女を見つけた。

また、会えた。

蝋燭の僅かな明かりにも煌く髪。

拳を握って振り上げている。

「こんばんは、いい夜ね」

拳を下ろして、何事もなかったかのように挨拶されてしまった。

優雅な微笑だった。

改めて見ても、綺麗だと思う。

昼の光の下よりも、儚い月明かりの下の方がより美しく見えた。

「この門が抜けられないのよ。何とかならないかしら？」

「この鳥居は結界の境ですから。何もないように見えても、誰かに招かれない限り中には入れませんよ」

「そう、やっぱり結界があるのね。それで、あなたは私を招いてくれないのかしら？」

招くのが当然とばかりに、不遜な態度で尋ねられた。

この少女には、それが妙に似合っている。

「遠慮しておきます。あなたを入れてしまったら、私が殺されてしまいますから」

「私はそんなことしないわよ」

憮然として言われる。

「あなたじゃないです。村の人にですよ」

「……そう、残念だわ」

「すみません。でも、どうしてここに来たんですか？」

尋ねれば、少し考える仕草。

「ここに神様がいると聞いたから、見に来たのよ」

「名守様にですか？

それなら、外祭殿でよければ案内しますよ」

「外祭殿？」

「はい。本祭殿には一部の人しか入れませんから。一般の村の人が詣でるための、祠のようなものです」

「そっちは私を入れても殺されないの？」

「結界がありませんから。あ、でも、一応内緒にしておいて下さいね」

「ええ、わかったわ」

少女が頷く。

「それじゃあ、約束です」

小指を立てた指を差し出す。

不思議そうに眺めて、真似をして出された小指。

鳥居を挟んで、指を絡める。

白く細い指だった。

少し冷たく感じる。私より体温が低いのかも。

手の冷たい人は心が温かいと聞いたことがある。

私が殺されないように気を使ってくれたし、もしかしたら良い人かもしれない。

船に乗っていた人をみんな殺してしまった人だけど、殺人者だからと言って非情とは限らない。

非情でなくても、必要があればそれはできる。

村の中の誰かが、私の両親を殺したように。

指を離す。

「今のは、あなたたちのする約束の流儀なの？」

「はい、指切りと言うんです」

「切ってないじゃない」

指摘はもっとも。

指切り。

愛の証に小指を切り落とすこと。

それが随分安くなった。

「きっと、音だけが置いていかれたんですよ」

「時代が意味を連れて行ったのね」

きっとそうだ。

時間はいつも同じように流れていく。

人はいつだって、それに必死にしがみつくだけだ。

時間は大切に。

「それでは、ご案内します」

鳥居を抜けて、外に出る。

結界の外。

出ても、何も変わらない。

結界なんて、ただの扉に過ぎない。

「こちらです」

「ええ」

夜道を先導して歩く。

彼女は後ろからついてくる。

村は死んだように静かだ。

今、私の後ろにいる少女を恐れて、家に閉じこもっている。

「世界に二人だけしかいないみたいね」
「そうですね」
そんな会話を交わしながら、砂浜に出る。
汀へと押しては返す波が、静かな音を立てる海。
夜の海は冷たい。
ぞっとするほど広く、深く、暗く。
意味もなく不安を煽る。
全ての命は海から生まれたらしい。
母なる海とはよく言ったものだ。
けれど、私たちの体は海の中で生きられるように出来ていない。
海に還るためには命を捨てるしかない。
「母が子供を殺しますか。罪深いですね」
「ユーロ連合圏では自殺は最大の罪とされるわ」
話が繋がってしまった。
類推能力が凄いのか、尋常ではなく気があっているのか。

どっちにしてもびっくりした。

「何で自殺はダメなんでしょう？」

「死んだ後に困るのよ。神様に怒られるの」

「そうですか」

外国の神様はどんな神様なのだろう。

この国の神様のように、無慈悲に慈悲深いのだろうか。

「一神教よ、こっちは。全知全能なる神様」

「そうですか」

また話が繋がる。

心を読まれている気分だった。

「この国にはたくさんの神がいると聞いたわ」

「まぁ、基本的にどこにでもいますね」

「あそこにも？」

港が出来たせいで、隅に追いやられた船を指差す。

「いると思いますよ。この国的には」

「他力本願ここに極まれり、というところかしらね」

「都合の悪い現象は全部神様に何とかしてもらえますから。
でも、全能の神だって同じだと思いますよ」

「残念ながら、我らが主は、全ての人に生まれながら罪を背負わせるのよ。
良いことしないと死んだ後も苦しむ羽目になると脅す、ろくでもないやつなのよ」

「ろくでもないですね」

「その罪はお金で赦されてしまうのだけど」

「……ろくでもないですねぇ」

「神は力。人の意思が介在するからそうなるのよ」

「それこそが生まれながらの罪ですか」

「頭と尻尾が繋がってるわね」

「ぐるぐる回ります」

自分の尻尾を追いかける間抜けな犬のように。

ぐるぐると。

前にも後ろにも進まない。

けれど忙しく動き続ける。
滑稽な生き物。
要するに人は成長しない。
円と言うよりは螺旋か。
一見進んでいるけれど、実は同じことを繰り返す。
真上から見ると、結局同じところを回っている。
「道に迷った？」
「物理的にくらいは真っ直ぐ歩きたいです」
そうこうしている間に到着する。
ぽっかり口をあけた洞窟。
傾斜した道が、地下へと続く。
「こっちです」
地下に足を踏み入れる。
洞窟の中には外からの光は届かない。
光源は蝋燭の明かりだけ。

淡い光が壁面の凹凸を複雑に浮かび上がらせる。
「暗いわね」
しっかりした足取りで進みながら言う。
「その割りに迷いがありませんね」
「夜目は利くのよ。私は闇に属するものだから」
闇。
暗がりに潜む者。
夜の眷属。
だから、彼女は夜にその美しさを引き立てられるのか。
「もうすぐです」
道の先に光が見える。
地底にある大きな空洞。
篝火に広い水面が照らされている。
「これは、地底湖？」
「海の水が流れ込んでいるんです」

地底の海。

波はない。

水の流路にある岩が力の伝播を妨げているらしい。

水面にポツリと突き出た小さな島がある。

大人が三人乗れる程度の島には、木製の祠があった。

「あれが外祭殿です」

「神様の住処にしては、随分と貧相ね」

「仕方ありません。国土が狭いですから」

「密度が桁違いなのね」

「ゆとりは大切だと思いますよ」

岸に繋がれていた小船に乗り込み、長い棒で湖底を押す。

水深は海に比べるべくもない。

「でも、触れ合いも大切よ」

膝を並べて舳先に座った彼女が手を伸ばす。

船尾で船を操る私には届かなかった。

「適当な距離は難しいですね」

手を伸ばす。

触れた。

ぎゅっと握る。

指を絡めあう繋ぎ方。

ひんやりした手が、私の熱で暖かくなる。

私の手は、彼女の手の冷たさに冷たくなる。

交じり合って同じになって、一つになる。

「やりすぎないことが肝要でしょうか」

離し難い魅力を感じる手を離して、船を進める。

彼女は小船から手を出して水面に線を引いた。

「欲望にはきりがないわよ」

「食べ過ぎても寝すぎても死にますから」

「あら、性欲はどうしたのよ」

重箱の隅を突かれた。

三大欲求。

食欲、睡眠欲、性欲。

「経験ありませんから」

経験のないことは何とも言えない。

はて、この場合自慰行為は経験に含むのだろうか。

一人で際限なく、とは思わない。

きりがなくなかった。

「私も異性との経験はないわね」

さらっと爆弾発言をされた。

「係助詞に微妙な機微を感じます」

「可愛い子を鳴かせるのは得意よ」

水をかき混ぜた手を引き抜き、雫を舌で受ける。

流し目が艶めかしい。

「泣かせる？」

「なかせる違いね。素直に声を上げてくれる子が特に好きよ」

くすくす。

声を立てて笑う。

「あなたみたいな子は初めてだけど、鳴かせてあげましょうか？」

「一応、かんなぎですから」

遠慮してみた。

謙遜と遠慮はこの国の美徳だったりする。

素直じゃないのだ。

嫌と言わずに無理と断るところに卑怯を感じる。

神様が沢山いるように。理由は外に求めてしまう。

「神様に身を捧げているということかしら？」

「いえいえ、縛られてるだけです」

「契約に？」

「呪いに」

「鎖はダメよ、痛いもの。蜘蛛のように絡めるの」

もがけばもがくほど、絡まっていく糸。

真綿で首を絞めるような。

じわじわと絡めとって、逃がさない。

「でも、縦糸は歩けます」

蜘蛛は自分の罠にかからない。

べたべたするのは横の糸だけ。

「歩いた先は巣の中心よ？」

「きっと、蜘蛛に会いに行くんです」

「自分の意思で堕ちるのね」

「鎖で吊られますけど」

落ちようとしたら首に鎖がかかっていて。

宙ぶらりんに首を吊る。

そんな感覚。

コツン。

舳先が島に当たった。

「着きました」

「そうね」

船を下りる。

祠の前に立った。

「ここは何をする場所なの？」

「困ったことがあると祈りに来ます」

「神様は助けてくれるのかしら？」

「名守様は結界を引くだけですから」

そういう契約。

それ以上の仕事はしない。

「ダメじゃないの」

「神様が関わらなくても、何とかなることって意外に多いんですよ」

本当にどうしようもないことなんて、そんなにない。

不治の病も、百年後には治るかもしれない。

人の力で。

それなら、偶然に治らないとも限らない。

「手柄は横取りされるのね」
「人が勝手に感謝するだけです」
神様は何もしていなくても、神様の力だと勘違いする。
祈ったから。
己の行動に縛られる。
人が勝手に作り出す呪い。
お礼にと一銭でも捧げれば、それはただの損だ。
なのに、喜んで損をする。
被虐嗜好でもあるのだろうか。
「この中には何があるの？」
祠の戸を指して聞かれる。
「名守様の姿を彫った木像がありますよ」
「そう。こちらは偶像崇拝が許されているのね」
興味深そうに頷いて、扉を開け放った。
奥には名守様の像が置かれている。

四面六臂――四つの頭と六つの腕――を持つ神様が、蓮の花の上に胡坐をかいている。

四面は喜怒哀楽の表情を浮かべ、六つの手には剣と矛、そして四枚の大盾を持っている。

「これが、あなたの神？」

驚きを隠さずにそう聞かれ、そうですと頷けば、

「あっはははははっ」

大笑いされた。

失笑や嘲笑の類ではなく、ただ面白くて堪らないという笑いだった。

「どうかしたんですか？」

「だ、だって、これじゃ、まるで化け物じゃないの」

彼女は背筋を震わせてそれだけ言うと、また笑い始めた。

「化け物……」

神像を見てみる。

顔が四つあった。

腕が六本あった。

なるほど、確かにこれは――

「――化け物ですねぇ」

「でしょう？」

顔を見合わせる。

「くくっ」

「ふふっ」

途端に笑いが込み上げてきて、気がつけば二人で大笑いしていた。

天井に笑い声が反響し、ぐわんぐわんと響く。

その音がまた面白くて、私たちは、ひたすら笑い続けた。

……

「ここには、これだけしかないの？」

ひとしきり笑った後、彼女が聞く。

「そうですね」

ここにあるのは化け物の像。

ただそれだけ。

それを大真面目に崇め奉る。

なんて滑稽。

「本祭殿なら少しは違うんですけどね」

「そっちには何があるの？」

「捧げられた名前とか、現巫様とかですかね」

「現巫？」

「名守の神を人の器に降ろした、現人神のことです」

「神なの？」

にやりと笑って言われる。

「化け物かも」

「そうでしょう？」

「顔が四つかもしれません」

「きっと、腕は六本ね」

きゃらきゃらと笑う。

何て罰当たり。

ぞくぞくする。

人はいつだって、禁忌と背徳に惹かれる生き物だ。

「これが原罪ですか？」

「性悪説とも言えるわね」

小船に乗る。

祠を突き棒で突いて船を出した。

「悪い子ね」

舳先で彼女が笑う。

「悪い子にされました」

私も笑う。

「私のせいなの？」

「他に誰がいるんですか？」

「それならきっと私のせいね。私は、嘘吐きだから」

「あ、私を騙してたんですね」

「そうよ。ふふ、本当は神様になんて用はないの」

三日月の形に口を歪めて、神を嘲る笑みを浮かべる。
己の主人をすら裏切る、反逆者の笑み。
「用があったのは、あなた」
「私？」
「そう。聞きたいことがあったの」
笑みが消える。
真剣な顔。
紅玉の瞳に星が瞬いた。
「私が船から降りたとき、何を言ったの？」
「は――」
感情を言葉に乗せるのに失敗して、呼気だけが漏れた。
あのとき、やっぱり彼女は気づいていた。
それを確かめるために、私に会いに来た。
たった一言なんかのために。
私が彼女に打ち込んだ楔を抜きに現れた。

「何よ、早く言いなさいよ」

不満そうに口を尖らせて言う。

外見相応なのに年相応には見えない幼い仕草。

可愛い。

これ以上引っ張ると怒りを買いそうだから、素直に白状する。

「綺麗だって、言ったんです」

「怖いじゃなくて？」

思い出してみる。

甲板から飛び降りてきた姿。

綺麗だった。

少しも怖くはない。

「はい。怖くないです」

「そう。返り血でも浴びていけば良かったかしら」

なぜか不満そうに言われた。

「怖がられたいんですか？」

「違うわよ。ただの確認。血に塗れた私をどう見るのか」

「血まみれですか」

想像してみた。

赤。

凄烈な命の彩り。

「引き立て役にしかならないと思いますけど」

「血と化粧を一緒にするのね、あなたは」

面白そうな声音で言うと、立ち上がった。

船が波紋を広げる。

舳先から前を向いて、首の後ろで結んでいた紐を解く。

するりと、豪奢な衣装が滑り落ちた。

ついでとばかりに下着も脱いだ。

白い肌が露になる。

肩から背中、腰に至る曲線が美しい。

それ以上に艶めかしかった。

振り返る。

仁王立ちだった。

色々と丸見えだ。

綺麗だ。

金の髪が滑り落ちる肩とか鎖骨とか。

控えめな胸の膨らみが描く曲線だとか。

さきっぽとか桜色だった。

視線は上から下に辿る。

隠す翳りもない陰部に目が引かれた。

無意識と言うか、本能に近い。

細い身体。

贅肉なんて言葉とは無縁だ。

芸術品じみた美しさ。

触れてはならないと思わせる。

滅茶苦茶に壊してしまいたいと思う。

禁忌を望む。

思考が空転した。

慌てすぎて空回っている。

そんな私を満足そうに見て、彼女は落ちた。

水飛沫が散る。

「ちょ――」

慌てた。

ただでさえ慌てているのに、まだ慌てられるのかと驚いた。

船縁から身を乗り出して水面を覗く。

水の中から彼女が顔を出した。

肩に手を置いて。

「ん……ちゅ」

唇を奪われた。

触れるだけだったけど、重ねた唇の柔らかさはよくわかった。

「な、ななな、なうわぁ！」

うろたえた挙句、海に落ちた。

どぼん。

冷たい。

衣が水を吸って重くなる。

それも気にならなかった。

肩に手が乗せられたまま。

体が密着する近さに彼女がいる。

金と銀の糸が水に踊る。

幻想的な光景。

身動きも出来ず、それに見入っていた。

息が続かないことに気がついて、慌てて水面に向かう。

ざばぁ、と水から顔を出す。

塩水に触れた目が涙を流した。

滲んだ視界に、彼女が顔を出す。

「好きよ。私のものになりなさい」

告白されてしまった。

こんな偉そうな告白、聞いたことがない。

でも、その言葉は嬉しかった。

望んでいたのかもしれない。

頷きそうになって。

首を横に振った。

拒絶。

「どうして？」

「だって私は、神に縛られていますから。自由はないんです」

「呪いで？」

「奪った名前で鎖をつけられて」

初名。

その人を支配する言霊。

生かすも殺すも。

縛ることも。

「そう」

頷く。

「でも、私はそんなものに囚われはしないわ。やりたいことは全部する。欲しいものは全て手に入れるの」

言い切る。

どこまでも傲慢な言葉で。

彼女は水面に飛び上がった。

水の上に立つ。

ふわりと落ちてきた黒い鳥の羽が水面に浮かんだ。

外国の神様は、天使という手下を連れているらしい。

頭に輪があって、白い翼があるのだと聞く。

けれど、神に逆らう天使もいる。

黒い翼の天使。

堕天使。

「私は必ずあなたを手に入れるわ。

私の名はアリューカ。覚えておきなさい」

言葉を残して、飛ぶ。
黒い翼を羽ばたかせて。
篝火の届かない天井近くの影に紛れて、見えなくなった。
名前がない私に、名乗り返す間を与えなかった。
「やっぱり良い人だ」
アリューカの消えた闇を見て、そう呟いた。

翌日。
敷地の中の掃除をしていた私に来客があった。
死装束の少女。
なるほど、生贄と言うわけだ。
アリューカの洋館に差し出されたはずの子だ。
彼女も、神社の結界を抜けることはできない。
鳥居を挟んで向かい合う。

「何の用ですか？」

顔を会わせたところで温める旧交などなく、彼女のいる理由なんかよりその用事の方が余程気になる。

端的に問えば、折りたたまれた紙を差し出された。

手を伸ばして受け取る。

「確かに渡したからっ」

手紙が私の手に渡ったとたんに、走り出した。

洋館の方ではない。家のある方向へ。

帰ることを許されたのか。

あるいは、逃げ出そうというのか。

「馬鹿ですね」

一度生贄にされた者が、幸せに帰れるとでも思ったのか。

一度捧げられれば、それは異端だ。

ガリガリと線を引く。

結界の内と外。

名祀のかんなぎたちが、結界を越えて村に行きたがらないのと同じ。

もう戻れないから。

受け入れられたとしてもそれは絶対に少数派だ。

そうしてしまう下地が、この村には出来上がっている。

「私には関係ないですけど」

駆けて行く背中から目を切った。

紙を開く。

手紙だった。

『今夜逢いに行く　アリューカ』

汚いのか流麗なのか判断に迷う崩し字で書かれていた。

短い手紙。

それだけで心が躍る自分がいた。

重症だ。

まるで、恋する乙女みたいじゃないか。

アリューカの触れた唇に指で触れる。

自分の物ではない温度がそこに残っていて、体の芯に火をつけられたような熱を感じた。

闇が覆う。

結界が招かなくとも、夜は来る。

アリューカを輝かせる時間。

鳥居まで出て、そこに姿がないのを見る。

その繰り返し。

もう何度目だろう。

時間が指定されてなかったから、日が落ちてから何度も繰り返していた。

神社の皆がアリューカを怖れて閉じこもっていてくれて助かった。

アリューカとの逢瀬を見咎められれば、私はただではすまないだろう。

鳥居の下にはまだ姿はない。

踵を返したとき、翼が空を打つ音がした。

振り返る。

「こんばんは」

アリューカが立っていた。

当然だけど、昨日とは違う服。

船に置いていかれた服は厳重に押入れに隠してある。

黒が基調で、飾り布が多いのは同じ。

けれど、露出が明らかに増えていた。

刃物で裂いたように腰布に深い切り込みが入り、太股の白がちらちらと見えている。

胸から下も大胆に切られていて、乳房の半分くらいしか隠れていなかった。

目の毒だった。

捕らわれてしまいそうな視線を逸らすと、アリューカがくすくすと笑った。

「あなたって、本当に可愛いわねぇ。

あんまり可愛いから、中々出てこられなかったわ」

「……っ！」

見られていた。

アリューカは、私が何度も何度も鳥居を訪れるのをどこかで見ていたらしい。

顔に血が集まる。

「覗き見なんて、趣味が悪いですよ」

平静を装って言い返した。

夜の闇が真っ赤になった顔を隠してくれることを願うばかりだった。

笑い声が少し大きくなる。

「私、夜目は利くのよ」

ばれていた。

「悪かったですね」

開き直って言う。

「悪くないわ。可愛い子は大好きよ」

「可愛いと誰でもいいんですね」

「あなたは特別よ。愛してるわ」

「うぅ……」

反撃したら止めを刺された。

全然ダメだ。

何がダメって、愛してると言われて反射的に喜んでいる自分がダメだ。

「好きな相手に触れたいと思うのは普通でしょう？」

手を伸ばす。

鳥居に引かれた境界に触れる。

「そういう相手以外に触れることってそうそうないですよね」

不可視の結界を挟んで、こっちとあっち。

向かい合う。

「ねぇ、中に入れて？」

甘い声で、誘われる。

堕ちてと。

迷いはない。

体の奥に燃える熱が、私に命じる。

それは私自身の願望で。

手を伸ばした。

掌を向かい合わせて、重ねる。

適当な距離。

私と彼女の間の、零の距離。

指を絡ませて握る。

結界はただの扉。

「いらっしゃいませ」

招く。

それだけで、敵は客人になる。

重ねた手を引いて誘えば、アリューカの体は鳥居を越えた。

金の髪が夜気に燐光を散らす。

軽やかに飛んだアリューカが私の首に手を回した。

指を絡めた片手は繋いだまま。

全体重が私の首とそこに回された片腕にかかっているはずなのに、少しも重さを感じない。

顔が近づいて、吐息が触れる。

「待って下さい」

唇が触れる手前で、肩を押さえる。

途端に不満そうな表情になった。

「何よ」

「こんなところで、見られたらどうするんですか」

「見せ付けてやればいいじゃない」

「そうじゃなくて、私が殺されますよ……」

「私が守ってあげるわよ」

「ダメですって」

拒んでいると、アリューカは手を離して飛び降りる。

「仕方ないわね。それなら、見られない場所に案内しなさい」

……

「どうぞ」

アリューカを部屋に招き入れる。

人に見られないのは、私の部屋くらいしかない。

空けていた部屋は真っ暗だが、アリューカには見えているらしい。

部屋の中に入ってあちこちを見回している。

「へぇ、これが畳なのね」

床に屈んで畳の表面を撫でる。

その隣を抜けて、行灯に火を灯した。

紙を一枚通した柔らかな光が部屋を照らす。

一つしかない座布団を勧めて、対面に正座で座った。

アリューカは、座布団の上におしりを落ち着けて、膝を揃えて倒す。

それだけで何か絵画のような趣があった。

「それで、何しに来たんですか？」

「手紙に書いておいたでしょう。あなたに逢いに来たのよ」

「むしろ、遭いに来たって感じですけどね」

「あら、迷惑だったかしら？」
小首を傾げて聞かれた。
瞳が、否定できないでしょうと語りかけてくる。
言葉を封じられて、私は黙ることしかできなかった。
「ふふ。何を、なんて聞かなくてもわかっていたくせに」
体を前に倒し、猫科の動物を思わせる動きで寄って来る。
膝立ちになって左腕を首に巻きつけられた。
下から、アリューカが私の顔を覗きこむ。
「期待していたんでしょう？
それとも、待ちきれなかったのかしら？」
視線に縫われたように、紅玉の瞳から目を離せない。
顔が近づく。
空いていた右手が、頬を撫でた。
「目を、閉じなさい」
その言葉に逆らえない。

逆らうことを、望んでいない。

言われるままに、目を閉じた。

視覚が遮断され、他の四感が鋭敏になる。

にじり寄って来るアリューカの膝が畳に擦れる音。

目の前まで近づいてきた気配から、かすかに花のような香りがした。

香水だろうか。

アリューカの吐息が唇に触れる。

けれど、彼女はそれ以上近づいてこない。

戯れるように、添えられた指先が頬から首筋へと撫でる。

焦れったく、時間が引き延ばされる感覚。

一秒の長さを忘れる。

長いのか、短いのかもわからない時間が流れた。

アリューカは、相変わらず触れそうな位置に止まっている。

「は――」

緊張が緩む。

無意識に、詰めていた息を吐き出す。

瞬間、彼女が笑む気配がした。

「んんっ！？」

「ん……ちゅ……」

最後のわずかな距離が詰められて、唇が重なる。

「ちゅぷ……ん、ちゅるる……」

「んん～っ！？」

息を吐いたまま身を強張らせている私の唇の隙間から、ぬめりを帯びたものが口の中に入ってくる。

驚いて目を開けてしまった。

これ以上はありえない至近距離に、アリューカの顔がある。

見て確認するまでもなく、唇は隙間無く触れあっていた。

「んちゅ……んふふ……。ちゅっ、ちゅぷ、じゅるる、ちゅぅっ」

「んんんっ……んんっ」

瞳を合わせ、口の中で笑ったアリューカが舌の動きを激しくする。

舐めたり、絡めたり、突ついたり。

どうすればいいのかわからないまま、その動きに口内を蹂躙された。

「ぴちゃ、はぁ……」

「ぁ――」

アリューカが唇を離した。

舌が抜けていき、泡立った唾液が糸を引きながら垂れ下がる。

思わず漏れた声は誰が聞いても名残惜しそうなもので。

聞きつけたアリューカが笑みを深くした。

「ふふ、物足りないの？　いいわよ。じゃあ、舌を出しなさい」

ちっとも頭が働いていない。

ただ、言われるままに舌を差し出した。

「いい子ね。ん……れろ、ちゅる……」

アリューカが舌を絡めてくる。

空気に触れながら、二匹の蛇のように絡み合った。

「ん、ふぁ……ちゅ、ぁはぁ……」

彼女の真似をして、舌を動かす。

口の端から唾液が零れて、舌を伝ってアリューカの口へと流れ込む。

「んく……あむ、ちゅるるるっ」

喉を動かして口一杯に溜まった唾液を飲み込み、アリューカが私の舌を銜える。

吸い込まれるようにアリューカの口腔に飲まれ、また唇が触れ合った。

アリューカの口の中は熱く、甘い味を感じるのは気のせいだろうか。

唇で舌を扱かれるのは、少しは慣れたかもしれないなんて余裕を消し飛ばすほどの、未知の感覚だった。

「あむ、んっ、むちゅ、ちゅうっ……ちゅぱっ、ちゅ、ちゅぷっ……」

「んむっ……んぅ、んっ」

体の奥にわだかまっていた熱が、限界を越えて暴走しようとする。

「んんっ」

思わず身を引こうとしたけど、アリューカがそれを許してくれな

かった。

左腕で頭を押さえ込まれ、右手はいつの間にか私の左手を畳に押し付けていた。

「ちゅっ、んちゅぷっ……れる、ちゅ、じゅ、ちゅうううぅっ！」

逃げられなくした私の舌を強く吸い上げながら、さらに体を密着させてくる。

力の抜けてしまった足を割って、アリューカが入り込む。

「ん！？　んぁ、ん、んんう！？」

その膝頭が敏感な部分に触れた瞬間、頭の中が真っ白になった。

「んんぅうぅぅぅぅっ！」

目の前で光が明滅するような錯覚。

アリューカが唇を離して満足げに笑った。

「ふふ、敏感なのね」

「あ……は、はぁ、はぁ……」

荒く息を吐く。

足の間が生暖かい液体で濡れているのがはっきりとわかった。

口付けだけで、なんて。

気だるい感覚。

体を支えることもできなくて、アリューカの胸元に倒れこんだ。

柔らかな感触に受け止められる。

「少し精気を分けてもらったわ」

髪を指で梳りながら言われた。

いつの間に。

もしかしたら、行為そのものを利用したのかもしれない。

房中術。

千年以上前に隣の大陸から入ってきた考え方。

性と生は切り離せない。

「ちゃんと調節したから、少し疲れるだけよ。お休みなさい」

それを聞いたのを最後に、私の意識は途切れた。

「……きて……起きなさい」

「ん……」

揺さぶられて、意識が浮上する。

部屋は暗い。

まだ夜は明けていなかった。

「って、どうしたんですか、それ」

ぼんやりと目を開けて、一瞬で意識が覚醒した。

燃えつきかけている蝋燭の光に照らされたアリューカは、全身を赤に彩っている。

髪は赤黒く固まり、衣服もあちこちが破れていた。

凄惨な姿。

だが、それがよく似合っている。

夜に美しさを引き立てられるように、血に染まる姿にもどこか退廃的な魅力があった。

「まるで、月ですね」

「本当に怖れないのね」

呆れたように言われる。

手に抱えていた何冊もの本を、床に放り出した。

「これ……奉納帳じゃないですか」

青い表紙。

紐で綴じられた書。

名守様に捧げた名前の書かれた、生贄の名簿。

「あなたを捕まえていた化け物を退治してきたのよ。言ったでしょう。必ず手に入れると」

事も無げに言った。

流石に、一瞬理解が遅れた。

「……腕は何本でしたか？」

「二本だったわ。頭も一つ。つまらないわね」

「はい。本当に」

つまらない話だ。

化け物が退治されただけの、よくある話。

昨日まで絶対だったのに。

「有象無象の神なんて、この程度よ」

「唯一神とは比べられませんか」

「あれは確かに強かったけど、それでも、所詮は神ね」

そう言う背中に黒い翼を幻視した。

五枚七枚の不揃いな十二の翼。

堕天使。

神を堕とした天使。

紅の瞳が、あなたは自由だと告げる。

「こんな格好ではあんまりね」

赤く染まった手で重くなった髪を払う。

執念深く固まった命の残滓が剥がれ落ちた。

「蜘蛛の巣の中心で、待っているわ」

絡めとるような笑みを浮かべて、アリューカは部屋を出て行った。

赤い足跡が部屋の外に続く。

奉納帳に手を伸ばした。

開く。

名前——

一面に、墨で書かれていた。

「く、くく……」

抑えられない忍び笑いが漏れる。

取り戻された。

化け物に奪われていた、過去。

化け物に奪われるはずの未来。

一夜で。

あまりにもあっさりと。

神を殺した。

私のために。

それを成せる彼女が、私を欲している。

これほどの幸福が、他にあるだろうか。

世界の全てが敵だとしても、きっと求め合う。
全てを滅ぼして、世界で二人きりの幸せを手に入れるのだ。
「あぁ――」
声にならない恍惚に震える。
それを抑えないまま、紙に並ぶ名前に目を走らせた。
私自身を、取り戻すために。

村外れの洋館へ向かう。
いつもの白い衣と緋色の袴。
他に服がないのだから仕方ない。
アリューカに頼んで、服を貰おう。
大きさは直さないといけないだろうけど。
土を踏む足音が響く。
村は静まり返っていた。

哀れな神様。

何百年も過ごしたのに、死んだことにも気づかれない。

神社は隔絶されている。

だから、誰もが血の海に眠っていても気づかれない。

怖れるあまり盲目になった村人たちには、見えないのだろう。

村の外に引かれていた線が消えているのが。

鳥籠がなくなったのに、巣箱に閉じこもっている。

白い壁の洋館に着く。

扉を押し開いて中に入る。

一階の床は、大理石。

手すりにまで模様を掘り込んだ階段を上ると、床は木になる。

差異を誤魔化すために絨毯が敷かれていた。

その上を踏んで、目的の部屋に入る。

声が聞こえていたから、予想はできていた。

「うく……は、ぁ……っ……」

「そんなに我慢しなくてもいいのよ。素直に感じなさい」

絵画や花の無い花瓶に飾り立てられた部屋。

部屋の真ん中に置かれた寝台の上で、アリューカが遊んでいた。

裾の長い黒い衣装。

組み敷かれている少女は何一つ身につけていない。

濡れ光るアリューカの指が下腹部を撫でると、少女は押し殺した声を漏らした。

「困った子ね。なら、こっちもしてあげるわ」

アリューカは、少女の胸に顔を寄せた。

汗に濡れているふくらみを、先端に向けて犬歯がなぞる。

硬質の感触に、少女の身体に緊張が走るのが見て取れた。

ゆっくりと時間をかけて先端までたどり着き、口を大きく開いた。

「いあぁあぁぁあっ！？」

声を上げて、少女の体が跳ねた。

「ふふ、それでいいのよ」

望む反応を引き出したアリューカが顔を上げる。

少女の乳首の周りに薄っすらと歯の痕が見えた。
噛みついたんだ……。
くす、と笑ったアリューカが私を流し見る。
さっきから気づいていたくせに、止めようともしない。
煽られていると理解している。
けれど、胸の奥でふつと燃える熱は抑えようがなかった。
足音を立てて歩み寄る。
「アリューカ」
呼びかけると彼女が私を見上げた。
「碧(へき)と申します」
取り戻した、私を告げる。
名祀のかんなぎは一年に一人だけ。
見つけるのは簡単だった。
存在を支配する名前を捧げた。
身をかがめて、彼女が何かを言おうとした唇を塞ぐ。

勢いがつきすぎて、ぶつかった歯がカチと音を立てた。

痛い、と思うのと同時に、アリューカの手が伸びてきた。

何をされたのかわからないうちに寝台に引き倒される。

いつの間にか体の位置が入れ替えられていて、アリューカが私の上に馬乗りになっていた。

私の代わりに解放された少女が部屋から逃げ出していくけど、私もアリューカも気にしなかった。

あれはもう、ここには必要の無い不純物だ。

「キスが下手ね」

笑みを含んだ声で言われた。

「仕方ないじゃないですか。こんなことするの初めてなんですから」

「それじゃあ、教えてあげるわ。色々とね」

艶やかに微笑む。

身体を包んでいた黒い衣装が、羽根にばらけて白い寝台の上に散った。

一糸纏わぬ裸体が露になる。

起伏には乏しくても、女の身体をしていた。

胸の先端がぴん、と尖っている。

「興奮してたんですか？」

「あなたがいつまでも焦らすからよ。ちゅ」

言葉に含めた棘をさらりと受け流して、戯れるように口付けを落とす。

ぴったりと体を触れ合わせて、器用に足を絡めてきた。

襟から差し込まれた白い指が胸を撫でる。

少しくすぐったい。

「外から見えるよりもしっかりしているのね」

「昔から雑用ばっかり押し付けられましたから」

「そうなの」

私の頭の横に手をついて、アリューカが体を起こす。

「嫌いになりましたか？」

「その程度のことであなたを手放せと言うの？」

回答のわかりきった疑問を発した唇をふさがれる。

「んっ……ん……」

「んぁ……」

「ん、ちゅ」

舌で唇を掠めるように撫でて、唇が離れる。

「好きよ、碧」

「んむぅ！？」

名前を呼んで、また口付けられる。

重なった唇を割って、アリューカの舌が口内に入ってきた。

「ちゅ、ちゅる……じゅ、れるぅ……」

「ん……ん、ちゅ、んんっ……ふぁ……」

舌を絡めながら、苦労して私も好きですと吹き込めば、愛しい少女は目を細めて微笑んだ。

この関係が、どれほどの屍の上にあろうとも構わない。

私は、彼女に恋をしたのだから。

＜おまけ＞

碧

中心部が碧(あお)く、外に向かうほど濃く黒くなる異質な瞳。
ぬばたまの黒髪を長く伸ばし、首の後ろで大雑把に二つに分けて両手首に結び付けている。
コンセプトは謎。
結局わかるのは容姿と年齢、名前だけである。美少女然としているが性別すら不明。
この時代の国の風習として、身分の低い農民ゆえに姓はなし。
純粋なヤマ人なのに瞳に青を持つのは遺伝子上の欠陥。
生まれつきか境遇によってか、色々と欠落している社会不適合者の狂人だが、それを自覚して普通を演じている。
飄々としていて、誰に対しても敬語調で話すが、それがキャラクターの把握をさらに難しくしている。
あまり物事に執着しないが、アリューカだけは別のようである。

アリューカ

血を固めて太陽に透かしたような、仄暗い赤の瞳。
腰近くまで伸ばした金髪をエメラルドの飾りがついた銀糸で無数の細い束に束ねている。
背中に黒い翼を持つが、普段は消している。透明かつ触れることもできない。
羽の数は気まぐれに増減するが、本人は右5左7の不ぞろいな12枚が気に入っている。
コンセプトは強さ。

問答無用、理不尽に、何の説明も無く絶対的に強い。
世界創世のときから唯一神の隣に控えていた最高位の天使にして神殺し。
自分とそれに類する世界だけがよければそれで良いという思考の持ち主で、味方に優しく敵には厳しい。
それが過剰に行き過ぎている点ではやはり狂人である。
気に入ったおもちゃでだけ遊んだ挙句に壊してしまうタイプ。
根本的には愛されたがりで、わざわざ小さい子供の姿をとっている。
そこでなぜ幼女なのかと言えば、本人の可愛いもの好きのせいである。
ぬいぐるみとか大好きなのだが、気に入られたぬいぐるみは使い潰されてしまう。
古い名前は、彼方を光で照らす者アリュミファエル。

名祀のかんなぎ
女性なら巫、男性なら覡。
一緒にして呼ぶときはかんなぎ。

ブラッディフラッド事変
創造神がとある事情で世界を滅ぼそうとして、戦った末にアリュミファエルに殺された。
そのとき、大地に降り注いだ神の血は、大地と川を赤く染め、百の都市を沈めた。
以来、堕天使アリューカとして数百年に渡ってユーロ連合圏に君臨していたのだが、
誰からも畏れられるのが寂しくなってきたので、鎖国していて情報を知られていないヤマ大国に渡った。
――というバックストーリーがあるが、至極どうでもいい話である。

（後書き）

さて問題です。碧は男でしょうか女でしょうか？
正解は、不明。読者の方の想像にお任せします。

いつもの私の作品は細かく設定して一々説明を入れるというスタイルで書いているのですが、今回は短編と言うことで雰囲気で読む作品を目指してみました。
こういう作風も面白いんじゃないかなと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1790k/

青き紅玉（Blue Ruby）は黒に焦がれる

2010年10月8日12時05分発行